都留文科大学研究紀要　第97集（2023年3月）
The Tsuru University Review, No.97（March, 2023）

内村鑑三　闘いの軌跡㈡

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzō (Part II)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第十一章　再臨運動と『羅馬書の研究』

一　再臨運動の展開

再臨待望の願い

再臨信仰とはイエス・キリストが世界の終わりの日に再び現れ、世を裁き、神の国を確立するという考えである。世界のプロテスタント教会の多くは、教派独自の信条を持つが、多くは再臨を肯定・規定する。例えば日本の各派プロテスタント教会には、信仰告白文とされる「使徒信条」がある。そこには「（主は）天に昇って、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを裁かれます」とあり、同時並行的に用いられているニカイア信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）にも、「主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。その国は終わることがありません」と再臨をはっきりと書き留めている。これらは礼拝において、会衆一同口誦するのが一般的である。それは外国のプロテスタント各派教会にも共通することなのである。

前にも記したが、わたしは一九八〇年代の終わりに、アメリカ西海岸に所在するオレゴン大学に客員教授として招かれ、一年間滞在した。大学はユージーンという中都市にあり、日曜日ごとにプロテスタント各派の教会に出席する機会に恵まれた。着任したのは三月下旬であり、その年の復活節の時期に相当した。そこで早速、目に入った大きな長老教会（Presbyterian Church）の復活祭礼拝に出席したのに始まり、年間を通して日曜日には、さまざまなプロテスタン

ト教派の礼拝に参加してみた。それはわたしの所属する日本の長老派教会の牧師が、強く勧めてくれたことでもあった。アメリカにある多くの教派の教会に出席することは、信仰の訓練にも、また、教会の歴史や組織を考えるにも大事だというのである。この体験は、滞米中のわたしにとって、専門の日本近代文学の研究や日本語教育を考えることと同様の重みを持っていたと思う。それ以前から、わたしは日本独特の無教会主義とは何かを考えるようにもなっていたが、アメリカのプロテスタント各派の教会の現状を知るのは、その課題ともつながっていた。

十年後、ニュージーランドのミドルタウン、ハミルトン市に所在するワイカト大学に招かれた時も、同様に長老派教会を中心に、いくつもの教派の礼拝に出席した。当時ニュージーランドの教会は、都市部は別として、農村部には立派な会堂があっても、専任の牧師がおらず、都市部の教会の牧師が兼任するというケースが目立ち始めていた。そこには令和時代を迎えた日本の地方の小さな教会や、都市部の伝道所の存在を思わせるものがあった。これらの教会での礼拝も、人々は再臨を肯定した「使徒信条」をI believe in God the Father Almighty, Maker of heaven and earth と口誦していた。

再臨信仰はキリスト教の歴史とともに存在していたと言ってよいのであろう。再臨は突然に来るとも考えられると同時に、来る時期を問いながら、待たれるものともされた。いわゆる再臨待望の願いである。鑑三はこの頃、長年のペンフレンドとなっていたアメリカのベルから送られてきた"Sunday School Times"（『日曜学校時報』）という雑誌を貰っていた。これはかつては鑑三自身が購入していた雑誌でもあった。同雑誌は、当時再臨を強く主張していた。鑑三の再臨運動には、ベルから送られてきたこの資料にも促されるかのようにして大きく展開する。

ベルからの手紙と資料に触発される

ベルからの便りに触発、高揚した鑑三の気持ちは、一九一六（大正五）年八月二四日付で、東京新宿柏木から出されたベル宛の英文の便りに見出すことができる。以下にその大事と思われる箇所を、例の如く山本泰次郎訳で示そう。

私としては、アナタから頂くどんな結構な品よりも、キリストの再臨に関するトランブル氏の論文をのせた『サンデー・スクール・タイムズ』の破れた一冊の方が、はるかに有難くありました。それによって、私は、私のうちに十五年の間眠りをむさぼっていた自分の信仰がゆり起され、幾年来経験したことがないほどの熱心と理解とをもって、新しく新約聖書の研究を始めるに至りました。アナタから十五年前に送って頂いたエイ・ジェール・ゴルドン博士の『見よ、彼来りたもう』を、塵の中から、古びたままに取り出して、強い感興をもって読み返えしました。今日まで多年の間私を悩ましていた問題は、大部分キレイに解けてしまいました。この世的の教会、よこしまな教師、心なき宣教師らは、もはや私の信仰の歩みには、いささかも、妨害物ではなくなりました。私は彼らを解し得るに至りました。「これらのことはすべておこらねばならぬ」です。バビロンは、とりも直さず、正しからざる職業的教会でありまして、

その中にはロマ・カトリック、組合、監督、メソジスト、浸礼、長老その他いわゆる教会全部がふくまれます。なんたる慰めぞ！　すべてが聖書中に預言されているのです！　私の心は平安です。もしキリスト再臨に関する大著作をご承知でしたら、その出版社といっしょにご通知下されば、幸甚の至りです。私の書斎にある数百の神学書は、すべてキリスト再臨千年後説をとるものばかりです。私は改めて聖書を学び直さねばなりません。そして私の歳でも、まだまだおそくはないと思います。

ここに再臨運動に関わっていく鑑三の気持ちが、よく示されていると言ってよいと思う。プロテスタント系の教会では、再臨は「使徒信条」に明記されていても、通常、外国でも日本でも、説教においては強調されることはない（日本の福音派の一部には、再臨待望の礼拝を持つグループもあるが、教派全体の運動としてはないとしてよい）。鑑三は宗教改革者ルターの再評価に熱心であった。

一九一七（大正六）年十月十日の夜、彼は京都帝国大学基督教青年会主催の講演会で、「改革者となる迄のルーテル」と題した講演を行う。ルターの宗教改革四百年を意識してのものであった。講演筆記は『基督教世界』の一七七七号（一九一七・一〇・二五）に、「文責在記者」の添え書きを付して載り、現在は『内村鑑三全集23』に「宗教改革の意義（十月十日於京都大学青年会）」のタイトルで収録されている。

宗教改革四〇〇年記念講演

宗教改革四百年の年、鑑三はルターの再評価に熱心であった。前章の終わりに、少し記したところでもあるが、内村鑑三はこの年十月三十一日の夜、宗教改革四百年を覚えての講演を東京神田美土代町の基督教青年会館で行なった。ルター研究家の佐藤繁彦と牧師の村田勤と共同しての催しであった。鑑三はこの集会で、「宗教改革の精神」と題した話をする。鑑三の講演草稿は、『聖書之研究』二〇八号（一九一七・一一）に載り、『ルーテル伝講演集』（岩波書店、一九二一・六）に収められた（『内村鑑三全集23』に収録）。

鑑三は右の講演を、「新文明又は新世界又は新時代は一五一七年十月三十一日を以て生れたのである」で始めている。言うまでもなく「一五一七年十月三十一日」は、ドイツの宗教改革者マルチン・ルター（Martin Luther）が、ローマ教皇を批判した九十五箇条の論題を公表し、反旗を翻した日である。鑑三は語を継いで、「此年此日を以て近世哲学と近世思想、近世科学と近世文学、代議政体と新国家其他近代人が享有する凡（すべて）の制度文物は始まつたのである、祝すべきは実に此日である、記念すべきは実に此日である」とまで語り、ルターの宗教改革の意義に熱弁を振った。

この夜、鑑三は一大決心をして会場の神田美土代町の基督教青年会館に向かった。懐には、この夜話すことの草稿があった。準備は十分出来ていた。健康もまずまずで、声の調子もよい。講演リハーサルも、何度かしたに違いない。日曜日の今井館聖書研究会での「ルターと宗教改革」と題した二回の講義（一九一七・一〇・二一、二八）もこなし、それは今回の講演の下地ともなり、自信につながった。

それにしても、鑑三は緊張していた。講演会はどうしても成功させたかったのである。この講演会は、鑑三門下の集まりではない。街に飛び出しての講演、ことばを変えるなら研究会的な聖書研究の

報告ではなく、何かを求めて集う、多くの未見の大衆を相手とするキリスト教講演会であった。しかも、その夜の集いは、「宗教改革四百年紀年大講演会」と謳われ、予定参加者にはプロテスタント各派教会の若い牧師や信者も多かった。いわゆる超教派のキリスト教集会である。講演に臨む前の緊張した気持を、鑑三は「再臨信仰の実験」（『聖書之研究』二二二号、一九一九・一〇）に次のように記している。

余の責任は重大であつた、余は思うた若し今夜貧弱なる集会として終らんには何を以て天下に謝すべき乎と、余は祈つた、然し尚心配であつた、曇りし空を仰ぎながら水道橋停車場より会場に向て徒歩した、神保町の辺に来りし頃余は心配の余り路の片隅に立ち帽子を脱して神に祈り且誓うた「神よ願はくは今夜の集会をして汝の栄を顕はさしめ給へ、之を以て恵に充ちたるものたらしめ給へ、汝若し此願を聴き給はゞそは汝が余をして書斎を出でゝ市中の講壇に立たしめ給はんとの証徴なる事を信ず、余は謹んで其命に従はん」と、斯くて余は神に言質を取られたのである。

幸い集会は盛会で、『福音新報』一一六七号（一九一七・一一・八）は、「聴衆は定刻迄に階下に満ち三階を略ぼ塞ぎ散会迄には三階にも多数の聴衆を見、凡そ千二三百名はありしならむ」と報道している。

草稿を貫くものは、「ルーテルの宗教改革は聖書の再発見」の立場である。鑑三は宗教改革は、「羅馬書並に加拉太書の再発見」であり、ことばを変えるなら「パウロの信仰の復興」であるとする。そして草稿は、「霊が肉に勝ち、愛が武力に勝ち、全人類が更らに復び再生の実を挙げんが為には、イエスを神の子と信ずるの必要があるのである」で結ばれる。格調高い再臨宣言ともいえるものが、この講演草稿に見出せる。鑑三の場合、こうした草稿が、演壇に上がって語られると別の深みを添える。その彫りの深い独特の風貌は、獅子吼のごとき弁舌と相俟って、より効果を発揮するのであった。そこには意識された演劇的効果といったものが伴っていた。

鑑三の再臨運動

内村鑑三が再臨運動を考えはじめたのは、すでに触れたように第一次世界大戦の終了間近の一九一七（大正六）年の夏のことである。アメリカが対ドイツ戦争に参加したことは、鑑三をいたく失望させた。彼は「米国の参戦 平和主義者の大望」（『聖書之研究』二〇二号、一九一七・五・一〇）で、「「剣を取る者は剣にて亡ぶべし」とのイエスの言は永久の真理である、独逸は剣を取て立つたのである、故に今や剣にて亡びつゝあるのである」と書く。このことばの意味は重い。それは約三十年後の日本にも当てはまることばでもあるからだ。鑑三はさらに、「米国今回の参戦は平和主義者に取り大なる失望である」とも言う。

この年十一月、ヨーロッパではロシア革命が起こり、ソビエト政権が樹立された。すでに述べたように、日本では吉野作造の大正デモクラシー論が若い学生を捉えていた。前にもあげた吉野の一九一六（大正五）年一月号の『中央公論』に載った論文、「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」は、憲法は民衆の利益と意向

を汲んで運用されるものであることを説いた画期的論考であった。吉野の理論は民本主義論と呼ばれ、日本の民衆のデモクラシー運動に理論的方向付けを与えた。こうした世の動きの中で、鑑三は再臨運動を開始するのであった。

ここに来て内村鑑三は、以前から再臨信仰を説いていたホーリネス教会の中田重治、日本組合基督教会の木村清松と手を組んで、再臨運動を組織化し、展開させることを考え、実施することになる。[1] 明くる一九一八（大正七）年一月六日、鑑三らの再臨運動は、会場を東京基督教青年会館に決め、はじめられた。基督再臨運動と呼ばれる大衆伝道活動の開始である。集会は毎週日曜日、午後二時から着実に持たれた。第一回の集会は、まず中田重治が、次に木村清松が講演し、鑑三は最後に登壇した。この日の講演会を鑑三はアメリカのベル宛の便り（一九一八・一・三〇付）に、「忘れがたい会合」となったと書き送っている。

続いて第二回が同年二月一〇日に、第三回が三月三日に同じ東京基督教青年会館で持たれた。集会にはプロテスタント各派の信徒をはじめ、評判を聞いて参じた若者や主婦も多く、いずれも一二〇〇余名の聴衆で賑わったとされる。第一次世界大戦を通して、西欧文明の破綻が明らかになると共に、科学の進歩や合理主義について深刻な反省が生まれてきたことは、鑑三らの再臨運動に勢いを与えた。同年四月と五月の集会は、神田三崎町のバプテスト会館で開かれている。鑑三はこの間、大阪・京都・神戸へ二度も基督再臨運動の講演に出向いている。

鑑三に「基督の復活と再臨」（『聖書之研究』二一四号、一九一八・五・一〇）と題した文章がある。『内村鑑三全集24』に入っているので、簡単に読める。巻頭に（三月三十一日神戸基督教青年会館に於て、又四月七日及び十四日に渉り東京神田三崎町会館に於て述べし講演の大意である）との記事を添える。『聖書之研究』に載った時には、「内村鑑三述　藤井武筆記」となっている。東京を中心とした再臨運動における連続講演で、鑑三は多くの聴衆の耳目をひいた。それは東京ばかりか、関西や福島・宮城・山形各地での伝道講演でも、同様なものがあった。数百人から時に千人を超える人々が、鑑三の話を聴こうと群がったのである。鑑三は東京柏木の一聖者から、全国的に有名な講演家（宗教家）として知られるようになる。彼の講演会には、どこでも数百人から一千人に及ぶ人々が集まり、その講演が記録された月刊誌『聖書之研究』の発行部数は、六千部にも及んだとされる。母体である聖書研究社から出る出版物も部数を伸ばした。

この年（一九一八）十二月一日午後二時からの東京基督教青年会館での講演「国家的罪悪と神の裁判」の副題には、「亜麼士書一章二章の研究」とある。これも藤井武が筆録し、『聖書之研究』二二三号に載った（『内村鑑三全集24』収録）。藤井は鑑三講演のよき筆録者でもあった。二十二日の日曜日には、「平和の到来」というタイトルで、第一次世界大戦終結を覚えてのメッセージを東京基督教青年会館で行う。この日は鑑三の前に、聖書学者の左近義弼の講演があり、その日は講演後に晩餐会（親睦会）が持たれている。鑑三のメッセージは、例の如く藤井武が筆記し、『聖書之研究』の同じ二二三号に載った（『内村鑑三全集24』収録）。副題に「路加伝第二章の研究」とある。鑑三の聖書研究は、常に現実と立ち向かうものとなる。彼の多くの聖書研究は、字句の解釈よりも現実と照らして聖書をいかに読むかにあった。

パウロを論じて自己の信仰を語る

同年十二月の『聖書之研究』（二二一号、一九一八・一二・一〇）に、鑑三は「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」と題する文章を載せている。これは鑑三の再臨信仰を考えるのに重要な文献の一つである。ここで鑑三は、冒頭「余の生涯に三度大変化が臨んだ」と言い、以下「三度の大変化」について述べるのである。第一の変化は、札幌農学校時代のことで、キリスト教に初めて出会い、「独一無二の神を認めた時」である。次に第二の変化は、「アマスト大学の寄宿舎に貧と懐疑とを相手に闘ひつゝありし時」で、「キリストの十字架に於て余の罪の贖（あがない）を認めし時」であったとされる。加えるに第三の変化は「過去一年間の事」で、「キリストの再臨を確信するを得」た時であると言う。そして「再臨を信ずるに由て余は初めて聖書が解し易き書となつた」と語る。ここで鑑三は「余はキリストの再臨が解つて人生が解つた」とまで言う。

一九一九（大正八）年三月二十三日から四月二十日までの五回に亘る日曜日（午後二時から）に、内村鑑三は東京基督教青年会館で「パウロの復活論」を講じた。『聖書之研究』の二二六号に藤井武が筆記した「講演の大意」が載る。「大意」を一読すると、鑑三のパウロへの打ち込みの情がなまなかのものではなかったことを知ることが出来る。鑑三はパウロを論じて自己の信仰を語っているかのようである。まとめの部分を以下に示す。

「主の業」とは特に伝道である、而して人の目に無益の如く見ゆるものにして伝道の如きはない、奔走四十年幾千人の青年に福音を宣伝して存（のこ）る者果して幾人ある乎、此の一事を知るのみにても伝道の無効を感ぜざるを得ない、況んや嘲笑迫害其他あらゆる患難に遭遇するに於てをや、然るにも拘（かかは）らず常に主の業を以て溢るゝ事を得るは一に信仰あるが故である、我等の生命は之を以て終るに非ず、キリストは其手の中に未来永遠の生命を握り給ふ、やがて彼れ再び来り給ふ時に我等の事業を悉く顕はし金の冠を以て我等に酬（むく）ゐ給ふのである、然らば今日多くの人に斥（しりぞ）けらるゝも何かあらん、嘲（あざ）けられ唾（つばき）せられ国賊と呼ばれ偽善者と罵（ののし）らるゝも何かあらん、我等も亦パウロの如く満々たる希望と凛々たる勇気とを以て活動する事が出来るのである、伝道の精神は全く此処にある、復活再臨の信仰を除いて人をして霊的活動に富ましめ能率ある事業に溢れしむるものは他にないのである。

雄弁の人、内村鑑三

藤井　武のまとめの文章は見事である。が、鑑三の講演は、活字では伝わらないものがある。その風貌、口調、身振り、手振り、さらには声量・声質・イントネーション・語りの間合いなどが、鑑三の講演を支えているのだ。作家の島木健作はこのころ友人に勧められ、基督教青年会館での内村講演を聴き、鑑三の風貌と講演の様子を『礎（いしずえ）』と言う小説[2]の中で次のように記す。実に巧みに、周到・適切に、当時の内村鑑三という雄弁の人・信念の人の姿を伝えている。以下に引用しよう。

講演は始まつた。その日の彼はピリピ書について講じた。彼は荘重な口調をもつて説きはじめた。かつて岩木が手紙に書い

て来たやうなその人の風貌は今すぐ前にあつた。それはまことに剛毅な威力ある人の風貌であつた。古武士の風があるといふ印象は適切であつた。だが単に剛毅な人はほかにもある。内村の剛毅は精神の絶えざる苦闘のあとによつて、その内なる魂が喘ぐばかりに求めてゐるものの深さによつて、厳粛な、沈痛なものにまで高められてゐた。その眉毛は太く長く、その半白の長い毛はややくぼんだ、長い目尻がやや下り気味の目の上にまでかぶさるやうに見えることがある。鼻柱も太い。口髭はほとんど白い。口から顎へかけての感じは非常に特徴的で強い意力をあらはしてゐる。眉毛の上の肉の盛り上つたところの太い線も入れて額には皺が刻まれ、目頭から目の下へかけて、小鼻の上から口もとへかけても年相応の皺があるが、それらはすべてぎゆつと引かれてゐて、彫刻的な印象を深めてゐる。

確信に満ちて力強く言ひ切る時、挑戦的な言葉とともに睥睨（へいげい）するやうに顔をあげる時、顎の力にぐんと押し上げられたかのやうに大きな口が結ばれた。次に口を開くまでの三秒か四秒かの間の顔はどんなことがあつてもたじろがぬ信念の人の意力と美しさとにみちてゐた。

かくも多数の人々を前にしてピリピ書を講ずるといふことは、内村として快心のことだらうと思はれた。キリストの弟子のうちにもしも内村を聯想せしめるものを求めたならば、やはり剛毅の人パウロであらう。激情的な性格も、伝道者としての苦難も、知識的な面が熱い信仰によつて貫徹されている点にも共通なものがあると言へよう。パウロにあらはれたキリストを説くとき、内村の精神は深い冥契のうちにとくに高揚した状態にあるもののやうだつた。

ピリピ書ではパウロは剛毅な人より優しい愛の人としてあらはれてゐた。内村はこの書にあらはれた愛と歓喜について説いた。希望と感謝について説いた。聖書のなかの句を読みあげる時の彼は荘重にして権威あるもののやうであつた。パウロとピリピ人との美しい愛の一致、愛の助け合ひについて語る時、彼自身その美しさのなかに浸つてゐるやうであつた。

真に巧みな表現で、一人の個性ある人物を捉えている。島木健作の聴いた鑑三講演は、「その日の彼はピリピ書について講じた」とあるから、鑑三がこの頃（一九一九年春）基督教青年会館を使っての日曜日ごとの講演（午後二時から、最終は一九一九年五月二五日）での一つであったことになろうか。前述のように三月二十三日の日曜日から四月二十日まで、鑑三は「パウロの復活論」と題した連続講演を行い、五月二十五日の日曜日には、「ピリピ書」三章、二十～二十一を用いての講演をしているので、これらの中のどれか一回を聴いたようである。日時の断定はできない。六月一日の日曜日からは、会場が大手町の大日本私立衛生会講堂に移っているので、連続講演「パウロの復活論」か、「天国の市民と其栄光」と題しての五月二十五日の講演が該当するとの推定はしてよいと思う。

会場を大手町の衛生会館に移す

東京神田美土代町の東京基督教青年会館は、地の利もよく、講演会場にはもってこいの場所であったものの、再臨運動の拠点として多くの聴衆を集めるに従って、無教会主義を唱える内村鑑三に会場

を貸すとは何事かのクレームが再臨批判者の人々から湧き上がり、一九一九（大正八）年五月二六日の会館理事会で、使用拒否を決める事態となる。もともと東京基督教青年会館は、プロテスタント各派の協力により一八九四（明治二七）年五月に建設され、広く一般にも開放されていた会館であった。が、教派に属さぬ無教会主義の内村鑑三が会館を使用して、大勢の聴衆を集めて再臨信仰を説くのはおかしいという小崎弘道（こざきひろみち）らの見解があって、追われたのである。

鑑三としては多くの人々を収容でき、交通の便もまずまずという利便性の高い東京基督教青年会館を追われることは、不本意なことであったが、そうした事態が生じても、鑑三の再臨信仰に賭ける意気は、止むところがなかった。別言するなら再臨運動にかける大きな期待と言えようか。彼は翌週からは、会場を大手町の大日本私立衛生会講堂に移し、時間を午後二時三十分からにして再臨講演を続けることになる。これ以後を、人は鑑三の再臨運動の大手町時代と言う。

一九一九（大正八）年六月一日、日曜日。午後二時半、内村鑑三は大手町の大日本私立衛生会館で再臨信仰の講演を行う。タイトルは「信仰の三角形」と題し、サブタイトルは「約翰（ヨハネ）第一書の根本教義」となっている。現在『内村鑑三全集25』に収録されており、そこには「内村鑑三述　藤井武筆記」とある。筆記者の藤井武は文才に恵まれた人ではあるが、鑑三の講演は、これまでもしばしば触れたように、その風貌としぐさ、さらには弁舌の巧みさや声量・声質といったものがあって、はじめて完成するものなのである。活字だけでは藤井の文才を借りても、どうしても伝わらないものが確かに存在する。そのことだけは特記しておきたい。以後、内村鑑三は毎日曜日の午後、東京丸の内の大日本私立衛生会館を根城に再臨運動を展開する。

二　三人の弟子
――藤井 武・畔上賢造・塚本虎二

藤井 武のばあい

ここで、この時期、鑑三の再臨運動と深く接し、その影響を強く受け、運動に協力しながらも、そのあまりに強いやり方に疑問を抱くことで、鑑三から精神的にも実生活上からも離れるという、きつい体験をした人々がいた。中には小説「背教者」を書いた小山内薫や日本の近代文学を一時リードした白樺派の有島武郎・志賀直哉・武者小路実篤・長与善郎ら白樺派の面々も数え上げられる。が、ここには先ずは再臨運動時代に直接の弟子として鑑三に師事し、共に運動に携わりながら不和を来たし、一時その許を離れるという藤井武・畔上賢造・塚本虎二の三人を採り上げる。

鑑三の精神が最も高揚し、灼熱の太陽のような状況を示すのは、娘ルツを失い（一九一二・一・一二）、第一次世界大戦が勃発（一九一七・七・二八）し、アメリカの参戦まで見る中で、再臨運動をはじめた時としてよいであろう。藤井武はまさにその頃上京し、鑑三の助手として聖書研究社で働くことになったのである。彼は一八八八（明治二一）年一月十五日、石川県金沢市の生まれ。一九〇四（明治三七）年、第一高等学校に入学、一九〇七（明治四〇）年、同校を卒業し、東京帝国大学法科大学に入学、在学中、内村鑑三の聖書研究会の会員となり、柏会に所属した。

藤井は大学を卒業後、すぐ伝道を志したが、先ずは社会を知れとの鑑三の勧めもあって、京都府に官僚として赴任。その後一九一三（大正二）年に山形県警察部の警視、翌年同県の理事官になり、デンマークのニコライ・グルントウィー（デンマーク復興の父とされる）の国民高等学校にならって、山形県自治講習所を上山（かみのやま）に設立するのに尽力する。が、一九一五（大正四）年、官僚生活に限界を感じ、山形県の課長職を辞職。鑑三に協力すべく上京し、その助手となる。この年の暮れ、十二月二十六日のことであった。

鑑三は、夜行列車で前夜山形を発った藤井を、早朝、新宿柏木の家に程近い中央線の大久保駅北口に出迎えた。こうしたばあい、鑑三には常に心配りがあり、優しく親切である。佐幕派の没落士族出身の彼は、いつになっても、こうしたばあい義理堅い。藤井は鑑三の姿を駅頭に認め、すっかり恐縮する。

以後しばらく藤井は、鑑三の誠実な助手として『聖書之研究』の編集・刊行を主とした仕事に当たり、鑑三の再臨運動にも深くかかわることとなる。けれども、再臨をめぐる藤井の一文が引き金となり、その上に柏会の会員で住友勤務の黒崎幸吉から委託された住友財閥の長男寛一の結婚問題をめぐっての対処方法で、決定的離反が生じる。この辺りのことは藤井自身「先生と私」（『旧約と新約』一一八号、一九三〇・四）に書いており（次章第十二章で詳説する）、政池 仁の『内村鑑三伝　再増補改訂新版』[4]にも、その経緯が詳しく述べられている。

恩師の屍を超えて

藤井 武が鑑三の三回に渉る講演をまとめた文章「基督の復活と再臨」（『聖書之研究』二一四号、一八一八・五・一〇）は、「今や信仰の復興は全世界に磅はくたる新機運である、再臨の高唱は精霊の導きに由る運動である」に始まり、その講演の要旨を的確に記す。藤井武は次に取り上げる畔上賢造と共に、鑑三の再臨運動を当初しっかり支えた。けれども、近くにいてその再臨信仰に深くかかわることで、英才藤井は、鑑三の考えや運動方針に次第に疑問を感じるようにもなる。右の講演のまとめは、そうした私情を捨てて、鑑三の講演そのものの再現に努力したかの感がある。

藤井 武の文章は、鑑三の言わんとすることを的確に表現しようとしている。その意をしっかりと汲んで、読者に伝えようとするのである。「余輩の運動は余輩自身の運動ではない、余輩は再臨を唱へ平和を唱へて唯聖書の註釈を試みつゝあるにすぎない」との含蓄ある鑑三のことばも、見逃すことなくしっかり書き留めている。鑑三のやや難解とも思われる神学も、藤井の手によって明快に文章化されるのであった。この時期の『聖書之研究』に載った鑑三の文章には、「内村鑑三述 藤井武筆記」が圧倒的に多い。鑑三は藤井武に助手としての給与を払い、その労にきちんと酬いている。なお、鑑三と藤井武との信仰に関わる確執と和解は、次章（第十二章）に譲る。

藤井 武は内村鑑三の没後四ヶ月の一九三〇（昭和五）年七月十四日、胃潰瘍で没した。四十二歳の若さであった。葬儀は今井館聖書講堂で行われた。義弟でもあった矢内原忠雄（矢内原は藤井の妻喬子の妹愛子を妻にした）は、黒崎幸吉主幹の雑誌『永遠の生命』第六十号（一九三一・二）に寄せた追悼文「真理の敵」で、以下のように書くことになる。

彼は恩師の屍を越えて戦ふといつた。あらゆる真理の敵に向つて戦線を布告すると叫んだ。その声はなほ吾人の耳朶に残る。しかも彼その人が早くも戦死してしまつたのだ。何たることであるか。地上の戦ひは我等に遺された。我等は彼の剣を拾ひ挙げて敵に向ふ。彼の屍を乗り越えて真理の敵と戦ふ。余は彼の死を悲まない。余は彼の剣を拾ひ挙げて敵に向ふ。彼の屍を乗り越えて真理の敵と戦ふ。内村先生は死しても藤井が戦ふと宣言したやうに、藤井も死しても我等が戦ふことを、人類に向つて宣言すると欲するものである。

なお、藤井 武全集十二巻は、矢内原忠雄と塚本虎二が責任編集の形をとって、藤井 武全集刊行会が発足し、没後早々に実現を見たものであった。もっとも実際の編集・刊行、そして発送の仕事は、矢内原がほとんど一人で行ったものであった。詳しくは小著『評伝 矢内原忠雄』（新教出版社、二〇一九・四）を参照して欲しい。『藤井 武全集』は、第二次世界大戦後、藤井の子息藤井 立と南原 繁両名の編集で、第二次版が岩波書店から刊行されていることも記しておく。

畔上賢造のばあい

畔上賢造が内村鑑三の助手となるのは、藤井武が鑑三の許を離れる一年ほど前からのことであった。畔上賢造のことは、これまで折に触れてその名を出してきたが、確認の意味もあるので、再臨運動に協力して行くまでのことに、簡単に触れておく。確認の意味もあるので、重複を厭わず書こう。畔上賢造は旧制上田中学校（現、長野県立上田高等学校）時代の満十五歳の時、信州伝道で上田に来た鑑三の講演をたまたま聴いたのが、その出会いの最初であった。鑑三は信州の風土を愛し、そのころしばしば伝道に訪れていたのである。

早熟の文学少年畔上賢造は、上田中学校を卒業すると上京し、早稲田大学の予科に入学、続いて文学部哲学科に入り、一九〇六（明治三九）年に卒業する。在学中の一九〇四（明治三七）年、東京新宿角筈の内村鑑三邸を訪ね、以後、鑑三主宰の聖書研究会に出席し、一九〇五（明治三八）年六月から『聖書之研究』に「角筈聴講録」を載せはじめる。大学在学中は、『リンコーン言行録』やスマイルスの『自助論』上、下巻、続巻を出し、一本にするなど、文筆活動も目立った。彼はヨーロッパ文学を愛し、翻訳もした。

大学卒業後は千葉県立千葉中学校（現、千葉県立千葉高等学校）の英語教師となる。彼は上田中学校時代から英語が得意で、後にカーライルの『クロムウエル伝』を翻訳するなど、語学力はかなりあったと思われる。が、中学校の英語教師職は、彼の質（たち）に合わなかった。この頃のことは、自伝『歩みし跡』[5]（警醒社、一九一七・一一）に見ることができる。そこでは、「あゝ中等教員！余が少年時代に於て最も嫌ひしものは教師であつた」と彼は書く。畔上賢造は中学校教育の目指す知育・体育・徳育が、「悉く我が理想と反するを見出」し、「今や教育は一の大なる器械である」のに気づき、独立伝道者を目指すのであった。

一九〇九（明治四二）年、畔上は郷里上田の出身で、東京の仏英和学校に学んだ成沢むつと結婚する。そして二年後の一九一一（明治四四）年、安定した職業であった中学校の英語教師をやめ、千葉

県山武郡東金町（現、東金市）で独立伝道を試みることになる、千葉県の山武郡は、師鑑三の若き日の伝道地でもあった。伝道の傍ら、彼は文筆の才を活かして翻訳や研究に携わり、生活費を稼ぐことになる。彼は生来書くことが好きであった。大学時代からもっぱら書くことで生活費を稼ぎ、弟の学費まで出していたのである。

畔上賢造と妻むつの間に長男道雄が生まれたのは、一九一四（大正三）年のことである。けれども、生活は常に苦しかった。彼はとにかく翻訳や偉人伝のようなものを書いては、かつかつの生活を維持していた。こうした中で生まれた長男の畔上道雄が、後年『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』（サンポウ・ブックス、一九七五・二）というユニークな本を書く。これまでの内村鑑三伝には、終ぞ肯定的には取り上げられなかった本である。

畔上道雄の『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』

わたしはこの本の存在とその意味を、若き日、日本キリスト教会浦和教会で共に聖書を学んだ、畏友今関恒夫（現、同志社大学名誉教授）から教えられ、目を開かされる思いを体験した。

この本はどういうわけか、多く存在する鑑三評伝の執筆者からは、無視されるか、軽く扱われるかしてきたかに思われる。例えば、これまでしばしば引用・紹介してきた、すぐれた評伝『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』を書いた小原信ですら、右の本を採り上げ、『羅馬書の研究』への畔上賢造の協力を認めながらも、「共著」とならなかったことへの息子道雄の見解を、「いささか一方的に過ぎる主張である」[6]（著者（小原信）が決定版と称するＰＨＰ文庫による）と実証抜きの一刀両断である。「身内の身びいき」と見られてしまったかのようだ。

概して研究者は、素人の見解を軽く見がちである。畔上道雄の当時の肩書きは、工学博士で、群馬大学電子工学科の教授となっている。他方、彼は父親譲りの表現力で、当時『思想の科学』や『図書新聞』などに盛んに寄稿していた。けれども、専門は電子工学ということもあってか、「生体情報科学を通じ、宗教の本質を探究する」（本書奥付の略歴による）という、学際的研究の面は、無視されてしまったかの感がある。こうした場合は、広く物事を見ることの出来る評論家の意見が参考になる。そこで、ここには本書『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』のカバー裏面に添えられた鶴見俊輔の「強烈な光をはなつ思想」という、ごく短い本書への推薦文の全文を示そう。

この本は、内村鑑三の信仰を、それをになう狭量な人がらとともにえがいた。狭量な人柄がその故に強烈な光をはなつ思想をうむ。それは地上のこととして見れば一つの喜劇であり、同時にその中に天意がひそんでいるのだろう。内村の弟子であり、それぞれがいっこくな人であった藤井武、畔上賢造、塚本虎二は、師の狭量の故に、またみずからの狭量の故に、追放されざるを得なかった。

明治・大正・昭和の敗戦をへて今日に至る無教会主義の伝統を、それをあえて資料に反して美化せず、生きた人間それぞれの精神のリズムとともに、この本は私たちに示す。

今関恒夫の勧めで、わたしは畔上道雄の本（『人間内村鑑三の探究 聖

と俗と狂気の間で』）をインターネットの「日本の古本屋」で検索すると、幸い比較的安い値段で出ていたので、早速購入手続きをした。そして本が到着するやメモを採りながら読み始めた。この本は、むろん今井館資料館にも入っている。しかし、借りて読むのと本に傍線を付しながら、さらにノートにメモを採りながら読むのとでは、だいぶ異なる。この本には、右に引用した鶴見俊輔が見事に射止めているような面が、確かにあった。

畔上賢造は中学校教師の職が性に合わず、独立伝道を目指し、鑑三ゆかりの千葉県東金の地で、農村伝道を始めた。が、それには厳しい生活難が伴っていた。彼は師事する鑑三と相談し、その仕事の手伝いをし、財政的支援を得る。当初は月何回か上京してのことだったが、一九一九（大正八）年一月には家族共々東京市外荏原郡戸越（現、品川区戸越）に転居し、内村鑑三の正規の助手として働くことになる。

当時鑑三は、助手の藤井武との確執がはじまり、藤井が一時鑑三の許を離れるということもあって、人手を欲していた。それ故、畔上賢造の上京を喜び、『聖書之研究』に執筆の機会を与え、その編集を任せ、畔上一家の生活を援助する。鑑三がキリスト再臨運動に本格的に着手する年のことである。以後、畔上賢造は鑑三のよき協力者として、その再臨運動を支え、鑑三の名著『羅馬書の研究』に、当初は共同執筆を約束されたこともあり、全面協力することになる。その経緯は、次節「『羅馬書の研究』の刊行」で、右の畔上道雄の本の詳しい紹介も含め、述べることにしたい。

この年（一九一九）の前後、鑑三の周囲は何かとざわめいていた。再臨運動の開始、一高に在学中の息子祐之の野球部での活躍が世間の耳目を集めるなど、よい意味での精神の昂揚に役立つ事件があった一方、弟子の藤井武の離反、それに警醒社書店刊行の『内村鑑三全集』第一巻の自らの意思による絶版、加えて再臨運動の拠点会場であった神田の基督教青年会館を追われるなど、負の面での事件も起こった。が、鑑三の鑑三たるところは、そうした負の面での事件をも、プラスに転化してしまうところだ。

それらは追い追い述べることにし、ここではこの時期から鑑三に深くかかわり、その後継者とまで見なされながら、これまた袂[※1]を分かつことになる塚本虎二にも、少しばかり光を当てておきたい。

塚本虎二のばあい

塚本虎二は一八八五（明治一八）年八月二日、福岡県朝倉郡久喜宮村（現、朝倉市）の庄屋の家に生まれた。生来能力的にすぐれていた彼は、福岡市の名門、県立中学修猷館（この学校のことは、小著『評伝豊島与志雄』（未来社、一九八七・一一）を参照されたい）から第一高等学校を経て、東京帝国大学法科大学を卒業する。大学在学中の一九〇九（明治四二）年、内村鑑三の聖書研究会に入門、柏会に所属した。

一九一一（明治四四）年、塚本は高等文官試験行政科に合格。農商務省に入省し、参事官まで昇進するも、一九一九（大正八）年五月、退官して聖書研究に専念する。塚本は藤井武の歩みにも似たかたちで官僚を辞し、聖書研究と伝道に乗り出したのである。彼は鑑三にも一目置かれた秀才であり、語学の才に長けていた。が、妻園子を一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災で失い、計画していたドイツ留学を中止し、鑑三の助手として働くことになる。このころの鑑三は、畔上賢造と塚本虎二という二人の優秀な助手を持った

ことになる。

が、昭和の時代に入り、一九二八（昭和三）年九月に、後述するところだが、畔上が独立して自宅で伝道を開始（上落合聖書研究会と名付け、日曜に開く）すると、内村門での塚本虎二の比重が俄然高くなる。当初塚本は、英語は無論のこと、ドイツ語やギリシャ語、さらにヘブライ語など、語学がよく出来て、しかも博学であったことから鑑三に信頼された。他方、とかく恐れ多い印象を与える鑑三と違って、塚本は物腰柔らかく、女性からの支持も多かった。そこで鑑三の後継者としての話さえ持ち上がるようになる。塚本虎二の講演会には、鑑三に迫るほどの多くの聴衆を集めるようになったという。

けれども、畔上が去った頃から二人の間には、理論上の対立が見られるようになる。それは塚本虎二が、無教会主義が他の全てのプロテスタント教派教会と対立しているかのような論を『聖書之研究』（一九二八・九～一一、全集31巻収録）に寄せたのに対し、鑑三が異議を唱えたのに始まる。鑑三は「積極的無教会主義」（『聖書之研究』三三九号、一九二八・一〇）で言う。「無教会主義は私の信仰である。私が無教会信者であるは、或人がメソヂスト教会信者であり、或人がバプテスト教会信者であり、或人が聖公会信者であり、又或る他の人が組合教会信者であると同じである」と。

さらに語を継いで、「私は教会の信仰と私のそれとの間に存する共通の信仰に就て語る。それ故に私は縦令（たとへ）羅馬カトリク教会なりと雖も其事業を助くる事が出来る、そして実際に助けた事がある積りである。其他メソヂスト教会、バプチスト教会、日本基督教会、聖公会、組合教会、ホーリネス教会等然らざるはなしであると信ずる。神の愛を説くに教会無教会、信者不信者の別はない」とまで言う。これは解りやすい無教会主義論と言えよう。本稿の結びで、彼は以下のように主張する。「基督教は武士道以下であつてはならない。然るに教会の為す所は往々にして武士道以下である。私はそれが故に屡々（しばしば）教会に対して憤慨を発するのである」と。

内村鑑三の出自は、佐幕派の没落士族であったことは、本論の第一章で詳しく触れたところである。彼の主義主張には、常に「武士道」が深く関わっている。その不敬事件への対応も、反戦論も、足尾鉱毒事件や日露戦争反対論も、そして当面の課題である再臨信仰においても、彼はそれを武士道と結びつけないではいられないのである。塚本虎二はそうした鑑三に、当初は反発しつつも従った。けれども、時至り、彼は自身の無教会主義を徹底しようと、やがて独立して「東京聖書知識普及会」を主宰。東京聖書研究会（後に「丸の内無教会基督教講演会」と改称）を始めた。一九二九（昭和四）年十二月には、塚本は、鑑三から完全に離れ、翌年一月『聖書知識』を創刊するに至る。この雑誌は後年、矢内原忠雄が大学を追われた直後に創刊した雑誌『嘉信』と共に、無教会主義の「紙上の教会」の双璧として、大きな役割を果たすことになる。

三人のすぐれた弟子との訣別

かくて鑑三は三人のすぐれた弟子、藤井武・畔上賢造・塚本虎二を持ったものも、いずれも彼らが成長するに従って、袂を分かつことになるのであった。鑑三が一九二六（大正一五）年十二月三日付で、アメリカのベルに宛てた便りの一節には、「目下立派な助手（三人）をもっていますが、キリスト教伝道者の持ち得る最善の助手です。

その一人塚本君は博学者で、大聖書学者で、あらゆる点で私よりすぐれています。畔上君は、当地へお出での節にお会いになりましたが、忠実な働き手で、遠方の都市や村落にたくさん伝道しています」[7]とある。塚本君とは、注を付けるまでもなく塚本虎二であり、畔上君とは畔上賢造を指す。直接名前を出していないが、いま一人は藤井武である。鑑三はこれら彼を支えた三人の助手に恵まれた反面、彼らが成長するに従って、その才によって傷つけられることが、しばしばであった。その実情は、次章「第十二章　死の陰の谷」で詳説する。

塚本虎二は俗に言う破門の形で鑑三の許を去る。否、藤井武も、その跡を継いだ畔上賢造も鑑三から離れて、独立伝道者となったのであるが、内実は鑑三との対立でその許を去ったのである。しかも、破門を告げた方も受けた方も大きな打撃を被ってのことである。なお、他にも多くの人々が一時鑑三を慕ったものの、詰まるところ、その潔癖症や徹底した無教会信仰に従って行くことが出来ず、その許を去った人が何と多いことか。明治時代から見ていくと、国木田独歩・正宗白鳥、そして、彼の懐にふかく潜入しながら、その許を去ることになる小山内 薫・有島武郎・志賀直哉ら作家の名も浮かぶ。これらの人々の鑑三離反のことは、これも次章（第十二章）に回す。

三　『羅馬書の研究』の刊行

『内村鑑三全集』第一巻の絶版

神田美土代町の東京基督教青年会館の利用を断られた内村鑑三は、翌週からは会場を大日本私立衛生会館に移し、再臨集会を続けることになる。大日本私立衛生会館は、東京の中心とも言える大手町の丸の内に位置した。鑑三は、意気軒昂、ここで再臨信仰を語った。一九一九（大正八）年六月一日の日曜日、午後二時半からで、その記録は、先にも触れた「信仰の三角形」（『聖書之研究』一九一九・八・一〇、藤井武筆記）として全集に収録されている。副題に「約翰（ヨハネ）第一書の根本教義」とある。

藤井の筆記は正確であるに違いないが、「約翰（ヨハネ）第一書」（『新共同訳聖書』「ヨハネの手紙一」）の講読としては、率直に言って観念的で解りにくい面がある。鑑三はここで「信と義と愛」の問題を打ち出して、キリスト教の大事な面を訴える。再三言及していることだが、鑑三の言わんとすることは、その身振り、手振り、表情、声音などを含んだ演劇的所作があって、初めて完成するものなのである。それ故、『聖書之研究』に載った藤井武筆記の活字文だけでは、伝わらないものがあるのは確かだ。とにかく大手町集会の第一日は、成功裏に終わった。鈴木範久の『内村鑑三日録10』[8]には、「入場を拒絶するほどの盛況であった。なによりも内村を驚かせたのは献金が一〇六三円もあったことである」とある。この時期の鑑三は自信に満ち、頼まれればどこにでも出かけ、キリストの再臨について語った。この年（一九一九、大正八）九月十八日、栃木県の宇都宮に、十月十六日、埼玉県の粕壁（現、春日部）に、同月二十三日には千葉県千葉にといった具合である。

鑑三は散歩を好んだ。家にいる時は、散歩で歩きながらも何かよきアイディアや思い付いたことがあると、すぐ帰宅し、それを文章化した。歩きながら思索するのは、鑑三の得意技であった。再臨運

動中の鑑三は、意気軒昂であった。その著書や主宰する雑誌『聖書之研究』の売れ行きは鰻上りで、よいこと尽くめのようにも見える。が、悩みも多かった。その第一は、『内村鑑三全集』第二巻以降の絶版という事件である。これは当時鑑三を頼って上京した畔上賢造の編集であり、警醒社書店の刊行であった。鑑三は畔上賢造の生活援助のためにもと考え、彼に編集を依頼したのであった。が、鑑三はその再臨説が日本基督教会牧師の富永徳磨から、同じ警醒社書店刊行『基督再臨説を排す』で攻撃されているのを知る。しかも警醒社書店がその一端を担ぐ広告文を新聞に載せているのを見るに至って、断固絶版を申し出た。そのことに関する委細は、鑑三の「所謂「再臨説の粉砕」に就て」（『聖書之研究』二二九号、一九一九・八・一〇）の一文に見ることが出来る。

警醒社書店は、京都時代の経済的に行詰まった鑑三に、出版の機会をしばしば与えてくれた書店である。社長の福永文之助と鑑三とは、一時は肝胆相照らすような昵懇の間柄であった。それなのに鑑三のキリスト再臨説を痛切に批判した富永の『基督再臨説を排す』を刊行し、新聞広告で派手に宣伝する、それに鑑三は我慢ができなかったのである。警醒社書店としては、売り上げが第一とのやり方であったようだ。が、鑑三には福永の長年の支援に感謝しつつも、その道義に反するような行為が許せなかったのである。

配慮ある鑑三のことば

鑑三は『内村鑑三全集』の編集を、自分を頼って上京してきた畔上賢造の仕事として与えていた。それゆえ第一巻だけで刊行を中止することは、その仕事を奪うことにもつながる。鑑三はこのことに気を配り、この年（一九一九）八月三日付で、当時まだ東京市外戸越に住んでいた畔上賢造宛て、以下のような手紙を出している。さわりの箇所を『内村鑑三全集38』から転記すると、「警醒社の件は篤と勘考致し候処、此の際「全集」発行は一時中止するのが最も正当且つ徹底せる途と存じ候、但し「地理学考」は既に取り掛り候事故、其の校正を全う致し度く存じ候、事此処に至りしは甚だ悲しみ候らへ共、之れには又神の聖旨の存する処ありと存じ候、君の生活費に尽きては小生責任を担ひ申す可く候間当分の処御心配に及び不申候、いづれ何か他に仕事を見つけ御依頼致す可く候」とある。

いかにも配慮ある鑑三のことばだ。彼は貧窮のアメリカ時代に加え、さらに苦しい京都時代があった。食うに食わずの時代である。それがあったからこそ、こうした配慮ある便りをいち早く書くことができたのであろう。当時、畔上賢造は妻子合わせて八人、その生活は決して豊かとは言えなかった。それゆえ『内村鑑三全集』編集の仕事は、収入の点から言っても大きな意味があったに違いない。鑑三はそうしたことも配慮し、全集編集の仕事を任せたのである。

畔上賢造は努力家であり、文章は巧かった。鑑三のやや舌足らずの講演も、加筆によって見事な文章にすることができた。彼は鑑三の全集に入れる文章も、見直し、新たなテクストを生み出す努力をした。そうしたこともあってか、『内村鑑三全集』第一巻の評判はよく、版を重ねていた。が、意固地な鑑三は、富永徳磨の警醒社書店から出た『基督再臨説を排す』を読み、加えて警醒社書店の売らんかな主義の新聞広告を見て、すっかり嫌気が差して、自身の全集を第一巻のみで中止しようとの決意をする。が、とばっちりは畔上賢造に及ぶことが彼には解っていた。この仕事は財政的にも、また、

文筆業を続ける上からも、畔上には大事だったことを、鑑三は見抜いていたのである。

ここに藤本正高編『独立伝道者畔上賢造』[9]という本がある。これは畔上賢造著作集刊行会が『畔上賢造著作集』全十二巻の別巻として編んだ本である。この本はこれまでしばしば採り上げた畔上道雄の『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』と共に、畔上賢造研究にとっての大事な資料である。本書第四章には、以下のような記述が見られる。

この「内村全集」編輯のために千葉より出てこられたのであるだけ、畔上先生にとつてもこの中止は大なる痛手であつたであらう。しかしそれ以後と雖も内村先生の他の書物の編輯、『聖書之研究』への寄稿及び編輯で中々多忙であつた。そして又その頃内村先生が毎日曜集会をしてゐられた東京丸の内の衛生会講堂で、内村先生を助けて講壇に立つやうなこともあつた。千葉の農村で十名内外の人に話してゐた畔上先生は今や七八百の人に話さねばならなくなつた。

この記述からすると、警醒社書店版『内村鑑三全集』第一巻の絶版による経済的損失は、畔上賢造にとってそう大きなものでなかったようだ。鑑三の配慮による仕事は、以前より逆に増えている。その後、鑑三と警醒社書店との和解（一九二〇・一二・一五）もあって、畔上の仕事は旧に復し、やがて上回る程になる。

鑑三の「ロマ書」講演

一九二一（大正一〇）年一月、内村鑑三は新たな気持で新年を迎えた。この年、彼は満六十歳となる。還暦の歳である。彼は本卦還りの宴の意味も兼ねて、一月十六日の第三日曜日から畢生の大作となる『羅馬書の研究』の基となるロマ書（『新共同訳聖書』「ローマの信徒への手紙」）の講演を、大手町の大日本私立衛生会講堂で開始する。これは『聖書之研究』に「東京講演＝羅馬書の研究」と題して連載された。連載第一回の『聖書之研究』第二四七号（一九二一・二・二〇）には、本文に先立ってリード（前書き）に、「本稿は内村の東京講演を基本として畔上が自己の研究をも加へて編纂したるもの、或意味に於て二人の共作と云ふべきものである」とある。さらに本書初版（一九二四・九・一〇）の「例言 一」には、以下のように記されている。

大正十年一月より同十一年十月に至るまで、二年に近き間、六十回に亘りて本書の著者内村は、東京市大手町所在の私立大日本衛生会講堂に於て、羅馬書の講解をなした。そして畔上はその講解を基礎として、之に少しく自己の研究又は意見を加へて、整理し編纂し、許さるゝだけの自由を以て之を文にし、且内村が之を修補し、以て『聖書之研究』誌上に連載した。此度それに多少の修正を加へて一書に纏めたるものが即ち此書である。故に本書の内容は大部分内村のものであり、その文章は大部分畔上のものであること、云ふまでもない。

忙しい鑑三には、講演を文章化するには時間がかかった。また、講演の文章化には引用した聖書の箇所の確認その他、面倒な作業も

必要であった。それゆえ晩年の鑑三には、藤井武や畔上賢造や塚本虎二ら、力量ある助手の協力が、どうしても必要だったのである。こうした鑑三の方法、よき筆記者（助手）を見出し、自身の講演を記録させ、それに手を加えて推敲し、雑誌『聖書之研究』にまず載せ、さらに手を加えて著書にするという方法は、それなりに賢い本造りの方法であった。

鑑三は聖書学にもすぐれた弟子たち、―藤井武・畔上賢造・塚本虎二らの助力を求め、その講演を文章化させた。彼らは厳密なテクストを作ろうと努力した。鑑三の弟子たちは、鑑三が集会で語ったことをその場で記録して『聖書之研究』誌上に載せる場合、正確を期すことを第一にした。鑑三の記憶違いや無駄な言い回しや重複は、訂正したり、削ったり、時には加筆したりした。けれどもこの方法だと、紙に印刷された文章は正確になるものの、講演時の熱気は薄れる。

畔上賢造の「ロマ書」への関心

『羅馬書の研究』の際には、畔上賢造の大車輪の助力があった。ここに先に名を挙げた畔上賢造の息子畔上道雄の書いた本『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』[11]を受け入れる視点が要求されることになる。先にわたしは畏友今関恒夫の助言を受けて、本書の再認識の必要を説いた。

畔上賢造には、後年『ロマ書註解』（一粒社、一九三〇・一〇）にまとまる『羅馬書釈義』第一、第二という註解書もすでにあって、当時から『羅馬書』（「ローマの信徒への手紙」）には、強い関心を懐いていた。また、その著者のパウロにも惹かれていた。彼の早い時期の著書『歩みし跡』（警醒社書店、一九一七・一一）には、「我心境に住む偉人の群」として、「使徒パウロ」「改革者ルーテル」「偉僧日蓮」が選ばれている。これらの対象人物は、鑑三が好んだ先人でもあった。はじめに置かれた「使徒パウロ」では、「イエスなくして吾人は遂に神を知ることは出来ぬ。同時にパウロなくして吾人は遂にイエスを知ることは出来ぬ」とまで言う。

そうしたこともあり、彼は鑑三から「羅馬書」の講義を活字にして『聖書之研究』に載せるよう依頼されたのを喜んだ。そして鑑三講演の日曜日の午前十時には、大日本私立衛生会講堂に朝早くから通い詰め、その講演を筆記し、間違いを正したり、補筆したりして雑誌『聖書之研究』に載せることになる。それは「東京講演＝羅馬書の研究」と題され、第二四七号（一九二一・二・一〇）から第二六八号（一九二二・一一・一〇）に載った。鑑三はそれを喜び、当初は完成したら二人の名で出そうと、畔上賢造にも話していた。が、結果はそのようには進まなかった。

『羅馬書の研究』の出現

内村鑑三著『羅馬書の研究』は、一九二四（大正一三）年九月十日発行の奥付を以て刊行された。関東大震災の一年後のことである。発行者は古賀合名会社の古賀貞周、取次所には向山堂書房と聖書研究社が並記されている。古賀貞周は鑑三ファンで、古賀合名会社の社長。わたしはこの人物がいかなる経歴の持ち主であったのかを長年気にしてきたが、現在のところ依然不明である。かつては国立国会図書館をはじめ、東京の主要大学図書館、それに近年はネットでの検索もままならず、現在のところ、何かと八方手を尽くして

もわからない。賢明な読者に教えを請うしかない。

出版費用は、全て古賀貞周が負担した。鑑三の名で記された「『羅馬書の研究』に附する序」に、そのことが記されている。そこには「聴講者の一人なる古賀貞周君が本書出版の費用を負担せられしを感謝す」とある。それだけに営業を目的とする出版社の刊行本とは異なり、思いのままの装幀も出来たのであろう。初版の判型その他を、今井館資料館蔵本（今井館資料館には、二種の『羅馬書の研究』が所蔵されている）で調べると、A５判、四隅と脊は皮製、題字は金文字箔押し、本文は七一二ページに及ぶ。正に豪華な、堂々たる書籍の誕生である。鑑三の単行本として七〇〇頁を越えるものは他にない。

題箋裏には「余と同時にキリストを信じ、一生涯を通して／信仰を共にし来れる、同校同級同室の友なる、北海道大学教授理学博士ドクトル宮部金吾君に／舊友の渝（かは）らざる愛を以て此書を献ず。／著者」の献辞が見られる。続いて鑑三の「『羅馬書の研究』に対する序」があり、さらにスポンサーとなって本造りに貢献した古賀貞周の「序」が続く。そこには「約二年の間毎日曜日大手町の衛生会館にこの研究を聴きに行つて著者に親炙し、熱烈なる幾多の同志と如何に恵まれたる日を送つたか、読者が読んで触れらるゝ同じ経験によつて充分に首肯されよう／汲めども渇きざるこれ永遠の業績、老瘠（ろうせき）の身の血も躍る思ひである」などとある。この文面からすると古賀貞周という人物は、刊行時点で鑑三より年上の人であったのではとの連想も湧く。鑑三には年齢・社会的地位を越えたファンが多いが、古賀貞周もその一人であったと言えよう。

ここでようやくわたしは、今関恒夫から出された課題「畔上道雄の『人間内村鑑三の探究　聖と俗と狂気の間で』の記述をどう思うか」に応えねばならない。畔上賢造は『羅馬書の研究』を共著で出すという鑑三の提言を喜んだ。彼は自ら記録した鑑三の講演草稿に毎日夜を徹して手を入れ、その間違いを訂し、不十分なところは十分加筆して補い、正確な本文造りに挺身したのである。若き日からヨーロッパ文学に親しみ、翻訳を仕事としてきただけに、彼は書くことには意識的であり、日本語の文章は、常に配慮して書いていた。その文章は長年の修練を経て、格調が備わっていた。鑑三はそれを認めていた。矢内原忠雄に「畔上賢造氏逝く」（『嘉信』第一巻、第七号、一九三八・七）という追悼文がある。そこで矢内原は、畔上の特色として次のようなことを書きとめている。

> 信仰に偽りがない事。贖罪、再臨、奇蹟等基督教の重要教義に就ても決して師の言を鵜呑に信ぜられたのでなく、自己のたましひの苦闘を経て信ずべきに至りて信ぜられ、且つ此の事を公表せられた。之は伝道者として正直と勇気と確信とが無ければ為し能はざる処である。

人を納得させる畔上賢造評である。『羅馬書の研究』は、七〇〇ページを超える大冊となり、原本を手にとると、重荷を感じるほどの、稀に見る大部の装幀美を誇る書物となったのである。が、鑑三と賢造の共著で出すという当初の約束は、反故にされ、著者名は内村鑑三一人として刊行されることになる。

『羅馬書の研究』誕生の貴重な証言

畔上賢造は[※2]『羅馬書の研究』刊行が間近になって、鑑三から連名を断られ、自分一人の名で出すと告げられた時、ひどく落胆した。それを子息の畔上道雄は『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』に書いている。以下のようである。

畔上としては共著の約束まである以上、内村の聖書の不勉強、あまりに非学問的な解釈をそのまましるすことはできない。それでは自分がこまる。かれは自分が筆記を読みかえして発見した「論理の欠陥や、立論の不正確や、結論の飛躍」を放任できなかった。共著である以上、片方の著者の欠陥を正し、自分の考えを展開するのは、むしろ彼に課せられた義務であると考えたのである。

内村の不勉強、独断、非論理は講演のときは彼のすばらしい魅力によっておおいかくされている。しかし、活字を読む者は講演のときの呪力（じゅりょく）から解放されている。もし畔上が、内村の生（なま）の講演をそのまま書けば内村のいろいろの欠点がそのままでてくるのではないか。畔上は「自由に訂正」することが自分の責任であり同時に義務であると思った。

わたしは畔上賢造の子息道雄の右の証言を是としたい。これは『羅馬書の研究』成立にかかわる貴重な、数少ない証言でもある。先にわたしは、藤井武が鑑三の助手として、『聖書之研究』に載る文章をしばしば筆録していたことを採り上げ、鑑三の講演は、「その風貌としぐさ、さらには弁舌の巧みさや声量・声質といったものがあって、はじめて完成するものなのである。活字だけでは藤井の文才を借りても、どうしても伝わらないものが確かに存在する」と書いた。同様のことは、『羅馬書の研究』に関しても言えるのである。鑑三は畔上賢造の『羅馬書の研究』への補筆、訂正を肯定した。

畔上賢造は全章の記述をしっかり点検、補筆した。矛盾を排し、誤りを訂し、重複の箇所をカットし、「あまりに非学問的な解釈」は除外した。鑑三の演劇的所作を含めての「ロマ書」の講義を聴くと、会衆はうっとりし、鑑三の弁舌の力に組み伏せられてしまうのであった。だが、筆記したものを冷静な眼で見ると、余りに誤りがあり、矛盾があり、重複があり、非学問的解釈の部分すらあった。そこで畔上賢造は、「ロマ書」の研究書を、共著にするという鑑三の言を信じて、誠実に添削・補訂したのである。

「ロマ書」に見られるパウロの信仰を如何に説くかは、キリスト再臨説とも深く関わる。本書は無教会主義の原典のように宣伝され、「日本人の手に成りし最初の大註解書」という広告文まで出た。それは、当時ヨーロッパでもカール・バルトの『ロマ書』の研究書が刊行されたこともあって、話題を呼ぶこととともなったのである。註解的なやや手の込んだ作業は、むろん畔上賢造の功績であった。パウロは鑑三の愛した先人である。パウロを語るときの内村鑑三は、時に厳粛な、悲痛なまでの表情に変わったであろうことは、先に紹介した島木健作の内村評からも伺えるところだ。だが、それは講演時の内村鑑三であって、客観的対象としての学問的書物には、そうした面は捉えきれない。むしろ邪魔であったろう。畔上賢造は、ひたすら研究物として客観的存在であるべき、『羅馬書の研究』を考えていたのである。

畔上賢造のテクストづくり

大日本私立衛生会講堂での鑑三のロマ書講義は、好評であった。それは何度も言うが、内村鑑三という特異な風貌の人物が、熱誠を籠めて地方訛りのない、標準アクセントの、いわゆる東京弁で、誠実に精魂を込めて語るところに、聴衆が惚れ込むという形で成立したものであった。けれども、それはそのままでは書物にはならない。文章化されると、そこには、間違いや矛盾や重複も目立った。また、舌足らずなところもあった。鑑三は文章家でもあったが、畔上賢造が点検・補筆してくれたテクストを肯定して、それ以上の加筆・訂正は、特にしなかった。

それは後年矢内原忠雄が、有能な女性筆記者に講演の速記を依頼し、原稿用紙に清書してくれたものを、自ら推敲・加筆して定稿に作り上げるという方法とは、かなり異なる。当時の鑑三には、もはやその時間はなかった。ただ、二十九講からには、別に自身の記した「約説」を加えた。そして自分一人の名で刊行した。それには古賀貞周というスポンサーの手前もあったろう。また、外向きには共著より単著の方がよいことは言うまでもないからだ。彼はやむを得ず畔上の了解を取って、単著の形での刊行を選んだのである。

『羅馬書の研究』はこうして世に出、好評を博した。が、初版における本書の成立事情を知って、それが余りに註解的過ぎるのに気付いた弟子たちの中には、落胆を現す者さえいた。例えば政池 仁は「惜しいことに内村の講演そのままでなく、筆記者畔上自身の筆で自由に訂正してある」[12]と不満を表す。また、山本泰次郎は、「もし、この大講演が全部、あの『ガリラヤの道』『十字架の道』のように著者自身の簡潔な、明確な、力強い高貴な文で、親しくつづられていたら、本書の迫力と価値とはいやが上にもあがっていたであろうに、とのなげきとうらみを覚えさせられる」[13]とまで言う。

鑑三の講演は、常に劇的効果を伴っていた。けれども、視聴覚を通しての感動は、活字になるとどうしても薄れる。『羅馬書の研究』のばあい、矛盾は訂正され、正確さは増したけれども、講演時の熱気は失せた。鑑三講演の虜となっていた、同時代鑑三ファンには、書物となった『羅馬書の研究』は、難しい、くどいとして、当初は理解されることが少なかったのである。

四　自身の信仰を語る

福音のマニフェスト

『ロマ書（「ローマの信徒への手紙」）は、使徒パウロがローマの信徒たちに送った福音のマニフェストである。ローマはパウロ時代の世界的都市であり、キリスト教の宣教にとって重要な都であった。パウロは to the Jew first の考えを持ちながらも、異邦人伝道をはじめたのである。それゆえ「ロマ書」（「ローマの信徒への手紙」）の主題は、「福音」となる。鑑三は準備をしっかり整え、一九二一（大正一〇）年一月から一九二二（大正一一）年十月まで六十回にわたるロマ書講演を行い、そこに自身の信仰を託したのであった。

講演会には毎回六〇〇人以上が参加したという。鑑三は張り切って毎日曜日の午前十時からの集会に出、「ロマ書」を講義した。彼の精神は充実していた。健康もまずまずであった。彼は状況に応じて語ることが得意であった。例えば一九二一（大正一〇）年三月二十七日は、その年の復活節に当たったが、当日のロマ書講義のタイ

トルを「羅馬書に於けるキリストの復活」と題し、四章二十五～八章十一節を扱うなどしている。また彼は「ロマ書」に限らず、聖書研究を解りやすいように独特の方法を以て行った。畔上賢造は「先生の聖書研究」を「頗る独特」と評し、以下のように書いている。[14] 近くにいて鑑三の聖書研究を熟知していた弟子のことばだけに傾聴してよいだろう。

文字の研究や註解のごときことには、先生は少し触れた位であまり深入しなかつた。文字学者、註解学者は他にいくらでもある。かゝる事には決して大内村を煩はすに及ばない、他におのづから人がある。しかし先生は先駆者である、創始者である。そして先駆者、創始者に必要なものは、専門的精密ではなくして、根本的大精神の闡明（せんめい）にある。そして之をなすには巨大鋭烈なる精神力、開拓力を必要とする。先生の聖書研究は、常に精神を深く探りて之を強く人の心に印象するものであつた。天性の独創力がそこに充分に力をあらはした。先生の講義には書物の黴のくさみは全くなかつた。預言者のごとく、詩人のごとくに、先生は自ら源流に汲んだものを携え来つたのであつた。拵へた講義ではない、練りあげた講義ではない、たゞ流れ出た講義であつた。そこに他の人の企て及びがたき非凡性があつた。その内容に於て必しも完璧ではなかつた。整然たる秩序を欠いてゐた。しかし或一の事を強く深く聴者の心に印象する不可思議の力があつた。論理の欠陥や、立論の不正確や、結論への飛躍などは、あとから数へたてればかなりにある。しかし聴いてゐる時はたゞ一の力強い感銘を受けて、先生が聴衆に印刻せんとする事そのまゝが聴衆に印刻された。これ先生がその所信を、強き精神力を以て、そのまゝに披瀝したからである。

これは「頗る独特」な鑑三の聖書研究への畔上賢造のすぐれた批評でもある。右の文章を要約するなら、以下のようになろうか。

一　常に精神を深く探って、これを強く人の心に印象づけるものがあった。

二　天性の独創力がそこにあり、書物の黴のくさみがなかった。

三　ある一つのことを聴く者の心に「印刻」する、不可思議な力があった。

鑑三は多くの聴衆を前に、精神の昂揚するままに、自己の考えを述べる。無論、準備は万端整える。そして、講演に際しては、まさに「預言者のごとく、詩人のごとくに、先生は自ら源流に汲んだものを携え来つた」のである。それ故に会衆の魂に食い込んだのであった。

無教会主義の聖典

畔上賢造の子息道雄は、「無教会主義の聖典」ともなった『羅馬書の研究』に関して、次のように書いている。[15]

キリスト教を論ずる者はまずロマ書を研究しなければならない。教会、無教会をとわず、カトリック、プロテスタントの区別なく、すべてのキリスト教の流派はその教義をロマ書の解釈においている（中略）。

この本を執筆したのは畔上であった。旧版[16]の序文では「この本の思想は内村のものであり、文章は畔上のものである」ときわめて控え目な表現で書いてあったが、現在の版ではこの序文が削られている。

『羅馬書の研究』は、大手町時代の鑑三の一大収穫であった。六十回に亘る長期講演は、毎回六百人以上の聴衆を得て、大評判になった。これまでもしばしば指摘したことながら、鑑三の講演は、他人の協力で活字になると、どうしても色あせる。藤井武・畔上賢造・塚本虎二といったすぐれた協力者を得ても、そのことは言えるのである。鑑三は筆の人であると同時に、それ以上に巧みな語り手、講演者であり、多くの崇拝者を生んだのであった。特に再臨運動以後の鑑三講演は、演技を伴った話し方に支えられて威力を発揮した。彼の独特な容貌と声量・滑舌、それにしぐさ（演技的動作）は一流であり、人々を確と捉えた。

人生百年ならぬ五十年の時代、鑑三はすでに六十歳を越えていた。老人の領域に達していたのである。が、この頃の彼は壮健であった。若い時はしばしば大病（腸チフスや悪性のインフルエンザ）を患ったが、壮年期以後の彼は総じて健康であり、日本各地をめぐり、無教会主義のキリスト教伝道に励んだ。大手町時代の鑑三は、「余の生涯の最高潮に達した時」と『羅馬書の研究』の「序文」に言う。そして「余は羅馬書を講じて余自身の信仰を語つたのである」とも言っている。死の前年の一九二九（昭和四）年五月二十七日の日記に、鑑三は以下のように『羅馬書の研究』を回想する。

久しく品切れであつた『羅馬書の研究』の新版（第六版）が出来て非常に嬉しかつた。何んと云ふても此書は我が著書中の中堅である。之に対し自分は一の聖き誇りを禁じ得ない。明治大正の日本に於て神が此書を作すの光栄を教会の人に与へずして無教会信者の自分に下し給ひしことを感謝せざるを得ない。此は監督たり神学博士たるに数等優さるの光栄である。日本人は当分の間此書に依りてキリストの福音の何たる乎を学ぶであらう。大会堂を建ずとも此書を遺して置けば福音は自づから我が同胞の間に拡がるであらう。七百頁の大冊の新たに我前に横はるを見て讃美の歌の新たに我心の底より挙るを覚ゆ。

山本泰次郎は鑑三の「ロマ書講演」に触れて、「ロマ書は実に聖書の中心であって、これを解することはすなわちキリスト教を解することである。主として罪と救いのことをのべているのであるが、その深い講解をもって内村は聴衆をしばしこの世ならぬ別世界に連れ去った」と書く。これは鑑三の書物となった『羅馬書の研究』をも含め、その前段階での講演に及んでいる批評である。さらに語を継いで「若い時に書いた『求安録』が彼の文学的作品の優とするならば、これは研究的作品の優である[17]」とまで言う。

書物となった『羅馬書の研究』は畔上賢造の努力もあって、その内容は深まり、誤りや矛盾もなくなって、無教会主義のキリスト教の聖典とも化した。もしも、講演がそのまま活字になったとしたら、すでに述べたように、人々は鑑三の聖書に関する研究不足、解釈の浅さ、矛盾などにも気づき、失望したことだろう。そうした欠点を防ぐべく畔上賢造は努力し、自身の研究をも提供した。そして鑑三

ひとりの名で出ることに、わだかまりはあったものの同意する。ここに同書の広告文にもある、「日本人の手になりし最初の大註解書」が完成し、世に出たのである。

同時代を生き、目の前に現実の内村鑑三を見、講演を聴いた人々は、内容はもとよりその風貌、時に迫るような語りの口調に酔いしれた。けれども、長い間鑑三に師事し、『聖書之研究』の刊行にも協力した有力な弟子の中には、『羅馬書の研究』を手にし、不満を懐くものも少なからずいた。誤りや矛盾や重複が訂され、より正確さが増したテクストに接しながら、彼らは公然と不満の意を表することになる。山本泰次郎や政池 仁の『羅馬書の研究』への言及に、わたしたちはそれを見ることができる。

加藤周一の『羅馬書の研究』評

時代が下り、第二次世界大戦後五十年以上も立った時点で書かれた加藤周一の『羅馬書の研究』評となると、その指摘する処は、畔上賢造の努力を評価したようなものとなっている。以下に加藤の『羅馬書の研究』評の関連箇所を引用する。[18]

第一次大戦以後、内村の後半生は、『聖書』の研究とキリスト再臨問題に集中される。その『聖書』の研究は、『内村鑑三全集』（全三〇巻、岩波書店、一九三二―一九三三）の五巻に収められるが、そのなかでも殊に優れているのは『羅馬書の研究』である。当時集め得る文献を広く集め、原文に拠って訳語を検討し、一行毎に詳細な註釈を加えながらその意味を説く。[①] そのことはまた同時に、内村自身の信仰の内容を、そのあらゆる面にわたって、提示するものでもある。文章は、[②] 内村の他の多くの文章にみられる誇張と華麗な装飾を絶って、簡潔で明快、まことに緊密で、筆者の全人格をそこにかけた迫力にみちる。これが内村の著作の中心であるばかりでなく、明治以後の文学的散文の傑作の一つであることに、疑いの余地はないだろう。（傍線筆者）

傍線部分に注目したい。傍線①の箇所は、先に指摘したように、畔上賢造が特に意識して行ったことなのである。②の傍線部も、これまた畔上が大胆に手を入れることで成った。内村講演を聴いて、当日の感激を呼び覚まそうとして『羅馬書の研究』を読んだ人と、講演を聴かずに、はじめて『羅馬書の研究』に接した人との違い、さらには鑑三とほぼ同時代を生きた人と鑑三を知ることなく後年文献上で『羅馬書の研究』を読んだ人との違い[※3]と言ってもいいのかも知れない。が、総じて講演を聴いた人が、後に刊行された『羅馬書の研究』を読むと、会場での熱気が伝わらないだけに、その文体に不満を感じる。また、鑑三の文章に慣れている人が、『羅馬書の研究』を手にすると、その「詳細な註釈」が時に邪魔になるのである。しかし、後世にも遺る書物としての『羅馬書の研究』は、畔上賢造という優れた弟子の入念な点検と補筆があってはじめて加藤周一の言うように、「明治以後の文学的散文の傑作の一つ」となり、現代にも生き続けることが出来たのである。

聖書研究に生涯を賭けた鑑三の金字塔

『羅馬書の研究』は、畔上賢造の協力もあって、聖書研究に生涯

を賭けた内村鑑三の金字塔となった。彼の聖書研究は、『聖書』六十六巻全てに及ぶ。『聖書』をこれほどよく読み込んだ人は稀だ。作家の正宗白鳥は、鑑三の聖書研究の並々ならぬことを指摘し、以下のように言う。「この聖書研究は彼の一生の大事業と言うべきで、社会罵倒論や、教会攻撃文や、人物評論や、戦争反対論などよりも、この聖書研究が、彼が世に残した価値ある作品なのだ。これだけ完備した聖書研究は、日本では他に類がないのではないか[19]」と。鑑三は生涯、真剣に旧・新、併せて六十六巻の『聖書』に向かった。その意気たるや壮である。彼に「聖書道楽」という一文がある。ロマ書の講演をはじめる前年、『聖書之研究』二四二号（一九二〇・九・一〇）に載ったものだ。

かいつまんでその骨子を紹介するなら、聖書研究は〈聖書道楽〉に陥りやすい。聖書道楽とは無論皮肉な言い方であり、具体的には聖書の文学的研究、考古学的考証、註解書の蒐集、聖書学者優劣の闘議（討議）などであるとする。その上で鑑三は、「聖書は迫害の血を以て書かれたる書」であり、「迫害の血を以てするにあらざれば解することの出来ない書」であるとする。彼は言う。「書斎に籠り、字典と文法を相手に其の意義を探らんと欲するも無効である」と。続く箇所では、「勿論知識有るは知識無きに勝ると雖も、知識は実験の代用を為す事は出来ない」と断言する。その上で「信仰の為に戦はずして聖書は解らない、福音の為に迫害らるゝ事、其事が聖書最善の註解である、此苦痛を経ずして註解書は山を為すとも聖書は解らない」との結論が示されるのである。

D・C・ベルの来日

アメリカ留学中に知り合い、終生の友となったD・C・ベルが来日したのは、ロマ書の講演をはじめて間もなくのことであった。ベルは病弱の息子チャールズの保養方々日本を訪れたのである。鑑三は滞米中はもとより、帰国後も精神的にはむろんのこと経済的にもずいぶん世話になっている。その次第は、ベル宛ての一八五通の鑑三書簡に伺うことが出来る。

ベルを横浜埠頭に迎えたのは、一九二一（大正一〇）年七月十九日の朝であった。当日の日記を『内村鑑三全集33』から、その全文を引用する。

七月十九日（火）晴　暑気強し、午前十時横浜に行き、桑港（サンフランシスコ）より入港の東洋汽船大洋丸に余の米国人中唯一の信仰の友なるデビット・C・ベル氏と氏の令息チャーレス君を迎へた、氏は齢八十一歳、僅々十日間滞留の予定にて日本に来られたのである、余が始めて氏に会せしは千八百八十五年（明治十八年）華盛頓（ワシントン）市の鉄道馬車の内に於てゞあつた、爾来三十六年、氏は余の信仰の長者として余の仕事を援けて呉れた、余が米国宣教師と関係を絶たざるを得ざるに至りし後と雖も、ベル君は故ハリス監督同様余を信頼して呉れ、常に余をOur Uchimura（我らの内村）と称んで余の後楯（うしろだて）となつて呉れた、多分余の為めに祈つて呉れた人でベル君程熱心に且間断なく又長く祈つて呉れた者はあるまい、此人にして此度び遠く余を訪問して呉れたのである、余は如何にして彼を歓迎して宜しきや其途を知らない、我ら大洋丸の甲板に手を握りて唯天に在す我等の父に対し

て感謝の涙を注ぐのみであつた、山桝船長接待の任に当り呉れ、我等四人横浜グランドホテルの一室に暫く信仰を談じ、昼食を共にし、余は彼等の上京を送りて品川に於て別れた、嗚呼三十六年前の華盛頓の会合！　其時に余を彼地に伴ひしドクトル・ケルリン氏が居つた、白痴教育の大家ジェームス・B・リツチヤード氏が居つた、余を歓迎し呉れし当時の米国文部大臣ハリス氏があつた、アマスト大学の生理学教授ヒツチコツク氏が居つた、而して彼等は皆天に往いて惟のベル氏のみ八十歳の高齢を以て余を見舞はんとて大洋を越へて来て呉れた、余は何やら在天の米国の友人等が代表者を送つて余を見舞つて呉れたやうに感ずる、然かも特に此時を選んで！　余が友人の援助を要する最の多き此際に！　特に此信仰の老友を選んで！「三十六年間一日たりとも君の為に祈らざる日ありしを覚えず」と余に証言し得る此人を選んで！　実に信仰孤ならず必ず友ありである。

鑑三はベルの滞在中、大手町の大日本衛生会講堂（鑑三は当時ここでロマ書の講義を続けていた）や新宿柏木の今井館聖書講堂を案内し、ベルを感動させた。七月二十一日の鑑三日記には、大日本衛生会講堂を案内して、そこでの毎週の集会の大要を聴いたベルは、「余は之を見んが為に遥々太平洋を横断し来りし充分の甲斐がある」と言ったとある。柏木の家や今井館聖書講堂を案内すると、「見る物聞く物一つとして彼をして感動せしめざるはなく、彼に取り、我等に取り、一生涯に再となき経験であつた」とも書き記している。

ベル滞在中の七月二十四日の日記には、黒崎幸吉らと軽井沢滞在中のベルを訪ねて、共に外人共同教会に出席した様子が記される。が、外人教会の当日の説教たるや、「何の独創的なる者なく」、落胆させられたと鑑三は書き留めている。なお、D・C・ベルは、鑑三没後三ヶ月後の一九三〇（昭和五）年六月に天に召された。

闘いの生涯を送った人

内村鑑三は正に、闘いの生涯を送った人であった。敗者の家系である佐幕派の家に生まれ、貧困と闘い、最初の結婚に破れ、アメリカに逃れて養護施設の一介の介護人として苦労し、アマースト大学でシーリー学長と出会い、宗教的回心を体験する。が、帰国後、最初に勤めた北越学館では、着任早々その高き理想は打ち砕かれ、這々の体で東京に舞い戻り、いくつもの学校をはしごをして教え、苦しい生活を維持する。

そうした中でやっと専任としての第一高等中学校（のちの第一高等学校）に就任できたものの、「不敬事件」を起し、学校を追われたばかりか、再婚した幼なじみの妻（横浜かず）を病で失う。その後、生活条件の向上を目指して大阪泰西学館に勤めるが、満足な給与も貰えず、貧困のどん底に陥り、喰うや食わずの生活を強いられる。その間、貧困故の肉親の弟妹たちと闘いもあった。その生活が辛うじて維持されるようになったのは、京都時代に佐幕派の岡田透の娘、しづを妻として迎えた頃からのことである。貧困生活の中でも彼は『聖書』を手放さなかった。

京都に移った頃から彼は著作に打ち込むようになる。『基督信徒の慰』は、その最初の収穫であり、文筆家内村鑑三の誕生を告げるものが、そこにあった。東京に舞い戻った鑑三は、『萬朝報』英文

欄や『国民之友』を舞台に、文筆家の名を高める。そして『東京独立雑誌』を経て、聖書の名を前面に出した雑誌『聖書之研究』を創刊するに至るのである。『聖書』の名を冠したこの雑誌は、以後、その死に至るまで続く。先の「聖書道楽」と題した小文の最後は、以下のようになっている。

聖書道楽は最も悪しき道楽である、是れ聖物を弄ぶの類である、故に之に適応する神の刑罰を免れない、心霊的傲慢が其れである、真理を解せざるに解したりと思ふが其れである。

具体的な名は出さないが、「聖物を弄ぶ」類の本は、二十一世紀の今日も数多い。日本語のレベルの低い、シリーズとしての聖書註解の翻訳書が出回り、他方、明らかに『聖書』を利用し、売らんかな主義で再話したような本まで出回っている。鑑三に言わせるなら、それらは「聖書道楽」から来る弊害と言うことになろうか。鑑三の聖書研究は、この時期、『羅馬書の研究』の他に、『ガリラヤの道』（警醒社書店、一九二五・九）と『十字架の道』（向山堂書房、一九二八・一二）がある。それらは体験を踏まえての、『聖書』の深い読みに支えられた聖書研究の賜物であった。

現代の教会は教派を問わず信徒の交わりを重視する。＜交わり＞、ギリシャ語の「コイノニア」の必要性は、新約聖書ではイエスのことばとして示される。鑑三は〈交わり〉の中心に存在するキリストに目を留め、〈紙上の教会〉と称した雑誌『聖書之研究』を刊行し、聖書研究に生涯を捧げた。彼の聖書研究の内実は、これまでしばしば述べたように、現実との格闘の中から生まれたものなのである。『聖書』は現実の諸問題と強く結びついて研究され、解釈された。彼が遭遇した不敬事件や足尾鉱毒事件やいくつかの戦争（日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦）への対応、『東京独立雑誌』廃刊をめぐる紛争、それに兄弟間の争い、さらに晩年の弟子問題等々における、その『聖書』理解（研究）は、生きる悩みを抱え、いかにすべきかを真剣に問う中で、深まったと言えようか。

本論を書いている途次に、聖書学者の関根清三が『内村鑑三　その聖書読解と危機の時代』[20]を刊行した。そこに同じような見方が示されているのを知った。関根は言う。「内村は単に書斎にこもって聖書を解釈した、いわゆる聖書学者ではなかった。むしろ聖書の読解に基づいて、現実の問題と斬り結ぶところにこそ、彼の真骨頂があった」と。内村鑑三の聖書研究を解く鍵は、『聖書』は彼の現実と深くかかわる形で存在したと言うことに尽きるのだろう。そこにこそ、この信仰者の＜闘いの軌跡＞を解く鍵があるとしたい。

注１　大正期の再臨運動に関しては多くの参考文献があるが、近年の収穫として再臨運動を歴史的に検討した黒川知文『内村鑑三と再臨運動　救い・終末論・ユダヤ人観』新教出版社、二〇一二年三月二〇日を挙げておこう。本書は綿密な調査によって、新たな角度から大正期の再臨運動に光を当てた労作である。

２　『礎』と言う小説[1]　島木健作の最後の長編小説。書き下ろしの作品として一九四四年（昭和一九）年一一月一一日新潮社から刊行。のち『島木健作全集 第一〇巻』図書刊行会、一九七七年一月二五日収録

３　矢内原忠雄「私の伝道生涯」『楫櫓』一九五六年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一八七ページ

4 政池仁『内村鑑三伝 再増補改訂新版』教文館、一九七七年一〇月三〇日。五二七～五三八ページ

5 畔上賢造『歩みし跡』警醒社書店、一九一七年一一月二五日

6 小原 信『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』ＰＨＰ文庫、一九九七年月一六日。五七六ページ

7 山本泰次郎訳『内村鑑三日記書簡全集8』教文館、一九六五年五月一五日。二〇八ページ

8 鈴木範久『内村鑑三日録10 再臨運動』教文館、一九九七年一月二〇日。二〇五ページ

9 藤本正高『独立伝道者畔上賢造』畔上賢造著作集刊行会、一九四二年一〇月一〇日。なお、この本は前半が「小伝」と題され、藤本正高による畔上賢造の評伝、後半は「追想録」で、黒崎幸吉・塚本虎二・森本慶三・大賀一郎・淺野猶三郎・三谷隆正・矢内原忠雄・石原兵永・金沢常雄・鈴木俊郎・塩沼英之助ら三十一名の追悼録が載るという、やや特異な編集がされている。造本なども含めると、『畔上賢造著作集』の別巻という印象を受ける。近年、大空社から復刻版が出て

10 ※4『聖書之研究』掲載の鑑三の説教や講義の多くは、藤井武・畔上賢造・塚本虎二らによる筆録である。

11 畔上道雄『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』産報（サンポウ・ブックス）、一九七七年二月一五日

12 注4に同じ。五四八ページ

13 山本泰次郎「解説」『ロマ（ママ）書の研究』教文館、二〇〇二年一一月　日。ページ

14 畔上賢造「創始者としての内村鑑三先生」『日本聖書雑誌』五号、一九三〇年五月一日、のち『畔上賢造著作集』畔上賢造著作集刊行会、第一〇巻収録。一九四一年一一月二八日、五八〇～五八一ページ

15 畔上道雄『人間内村鑑三の探究 聖と俗と狂気の間で』サンポウ・ブックス、一九七七年二月一五日。二一〇ページ

16 旧版 向山堂書房・聖書研究社併記の奥付で出た『羅馬書の研究』初版を指す。刊行は一九二四年九月一〇日

17 山本泰次郎「解説」『内村鑑三聖書注解全集 第一六巻』教文館、一九六一年一一月五日。二五〇ページ。のち、『ロマ書の研究』教文館、二〇〇二年一一月収録

18 加藤周一『加藤周一著作集第5巻、日本文学史序説下』平凡社、一九八〇年五月九日。四〇五～四〇六ページ。初出は『朝日ジャーナル』二一巻三六号、一九七九年九月二一日

19 正宗白鳥「内村鑑三―如何に生くべきか―」『社会』一九四九年四月一日～五月一日、のち『正宗白鳥全集』第二五巻、福武書店収録。一九八四年六月三〇日収録。二〇九～二六一ページ

20 関根清三『内村鑑三 その聖書読解と危機の時代』筑摩書房、二〇一九年三月一五日。一五ページ

【紀要編集委員会より】関口安義先生は、２０２２年12月にご逝去されました。そのため、文章はそのままとし、紀要編集委員会の責任において、誤字などの確認・訂正のみとさせていただきます。

【訂正点】

※1　たもと袂を分つ　→　袂を分かつ

※2　『羅馬書の研究』が刊行が間近になって　→　『羅馬書の研究』刊行が間近になって

※3　違いとと　→　違いと

※4　『『聖書之研究』↓『聖書之研究』

受領日　二〇二二年六月二三日
受理日　二〇二二年一一月二日